
終わりという名の

まったりorz

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終わりという名の

【Nコード】

N4667B

【作者名】

まったりorz

【あらすじ】

好きって事が解らない。信じる事が恐い、そんな私と君の一日。

手を繋いだ。

初めて、私から。

もう、少女じゃないから。

解っていた事だ。何れ、こういう日が来るって事。

そう、なんだけど。

私たちの間に、冷たい風が吹く。

その度に、色あせた落ち葉が、かさかさと舞い上がる。

【終わりという名の】

私はクリーム色のコートの襟を立てた。

空は、どんよりと鉛色に埋め尽くされている。

君は、隣で煙草を取り出した。

冷たい風に邪魔されて、思うように火種を作ってくれないライターに苛々してる。

二月の人気のない公園は、陰鬱な空気が吹き荒れていて泣き出しそうな空のせいかな人気はなく、寂れている。

自然と、私たちも口を閉ざす。

ただ繋いでいるだけの手も、風に晒されて冷たくなってしまった。

君はやっと火の付いた煙草の紫煙の先を冷めた目で追っている。

お互い、何かを探り合うような、でも、どこか諦めているような、そんな沈黙。

ただ、ベンチに座って、手を繋いでいるだけ。

私たちのしてきた関係は、それに良く似ている、と思った。

どちらかが、動き出すと、もろく崩れ去ってしまうような、そんな関係が続けてもう二年経つ。

始まりも終わりもない、ただ何となく寂しさを埋めあうだけの関係は、世の中に溢れかえっているはずで、別に私たちがオカシイわけじゃない。

ただそれに虚しさをふと覚えてしまうのも、当たり前な事実なわけ。

「ねえ、私の事好き？」

私は、こんなありがちで幼稚な質問をする女だった？
弱さを盾にするつもりも、優しさを利用するつもりも、ないとは言
い切れない自分がいる。

「好きって何？」

君は、少しの沈黙のあと、ぽつりと呟いた。
拒絶でもなく、誤魔化しでもない、単純な疑問。

そう、そんな人間だって、わかっていたし、私もそんな人間だ。

過剰な期待は重荷だけで、理想を押し付けられるのも、見返りを要求されるのも、苦痛だけの人間。

自分の愛し方さえわからない、そんな寂しい人間なのだ。

「好きって、なんだろう。」

私の質問の答えも、君の質問の答えも、君の吐き出す紫煙のように、うやむやに宙に消えていく。

ひたすらに何かを求めているような、でも何も求めていないような、そんな晴れない気持ち。

「俺と、終わりにしたいの？」

少しだけ、私の手を握る手に力が入る。

「終わりにした方がいいと思う？」

私も少しだけ、意地悪な言い方をして。

今の私たちを繋いでいるのは、何？

たまたま、住んでいる場所が近かった。

たまたま、共通の友達がいた。

たまたま、出会った。

たまたま、お互い寂しかった。

流されるだけの時間の中で、私たちの時間が二年流れていった。

恋焦がれるわけでも、愛を囁きあうわけでもなく。

「終わりにしたら、どうなるの？」

ざわめいていた落ち葉は、私たちの足元で動かなくなった。

「終わりなんて、何度も経験してるでしょう？」

「…そう、だな。」

そう、私たちはただ、怖かったのだ。

誰かを愛しても、誰かと愛し合っても、終わってしまえば全ての言葉は嘘になる。

一生懸命、絆を築き上げても、それは崩れさって、ただの他人になる。

そんな不確かなモノを信じる事が。

きつと君と別れたら、始めは寂しくても、またお互い別の人と何となく付き合ったりして、

寂しさを忘れていく。そんな事を繰り返すんだろう。

それがいいのか、悪いのか、自分自身答えを見出せないままにいる。

「私ね、春から仕事で広島に行く事になった。」

「え？」

私の時間は、今までとは違う所で、流れる事になる。

何となくの関係で繋がっていたバランスは、そうやって崩れていく。

じりじりと短くなった煙草の灰が落ちて、君はそれを踏み潰した。

どこかもやもやと晴れない気持ちのまま、時間だけが過ぎていく。

「そろそろ、俺たちも動き出さなきゃいけないんだな。」

長い沈黙の後、君はそう言った。

繋いでいる華奢な指も、どこか冷めた目も、呟くように必要最低限しか話さないところも、

同じ事に、傷付いてきたところも、その時、初めて私は、愛しいと
気付けた。

結局、私たちは、似たもの同士なんだろう。

「私は、多分好きだったよ。」

どこか、少し照れくさそうな君の目と、目が合う。

「うん、俺も。」

信じる事が恐いとか、終わる事を思うとつらいとか、そんな所か
ら一歩踏み出すように、

冷え切った唇同士、キスをした。

繋いだ手は、離れなかった。

FIN

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4667b/>

終わりという名の

2010年10月9日13時19分発行